

日蓮大聖人御書全集

ひょうえのさかんののにようぼうごへんじ

兵衛志殿女房御返事

もくごによ　こと

（牧牛女の事）

ひようえのさかんののにようぼうごへんじ もくごによ こと

兵衛志殿女房御返事（牧牛女の事）

けんじ ねん がつ にち さい いけがみむねなが つま

建治 3 年 ('77) 11 月 7 日 56 歳 池上宗長の妻

あかがね ご きふた た お

銅の御器二つ、給び畢わんぬ。

しやかぶつさんじゆう おんとし ほとけ 成 はじ そうろうとき

釈迦仏三十の御年、仏になり始めておわし候時、

もくごによ もう によん ちち 粥 煮 ほとけ 進

牧牛女と申せし女人、乳のかいをにて仏にまいらせんとし

そうら 入 うつわ びしやもんでんのうとう

候いしほどに、いれてまいらすべき器なし。毘沙門天王等

してんのう しはち ほとけ はち 打 重

の四天王、四鉢を仏にまいらせたりし。その鉢をうちかさ

粥 ほとけ 成 たも はち

ねて、かいをまいらせしに、仏にはならせ給う。その鉢、

のち ひと 盛 つね はん 満 のち

後には人ももらざりしかども常に飯のみちしなり。後に、

めみようぼさつ

もう

ぼさつた

きんせんさんかん

報

馬鳴菩薩と申せし菩薩伝えて、金銭三貫にほうじたりしな

り。

いま

ごきふた

せんり

送

しやかぶつ

進

たま

今、御器二つを千里におくり釈迦仏にまいらせ給えば、

ふく

くわ

もう

そうろう

かの福のごとくなるべし。委しくは申さず候。

けん じさんねんひのとうしじゅういちがつなか

にちれん

かおう

建治三年丁丑十一月七日

日蓮

花押

ひようえのさかんののにようぼうごへんじ

兵衛志殿女房御返事